

まほろば創業 32 周年記念

恩
讐
の

彼
方
に

—
前
篇
—

まほろば主人

宮下 周平



国破山河在 城春草木深

感時花濺淚 恨別鳥驚心

国破れて山河在り、城春にして草木深し

時に感じては花にも涙を濺ぎ、

別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

(「春望」杜甫)

原発の地を訪ねて

「……と、笠打敷て、時のう

つるまで泪を落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢の跡……」

杜甫の詩に重ねて、芭蕉は平

泉にて藤原三代の無常を詠んだ。

二〇一五年七月十日、奥州の

連なり福島県の浜、無人の大熊・

双葉の町街道を車で走り抜けな

がら、この詩が口を衝いて出た。

盛夏七月、鬱蒼とした木々が陽

炎のように天に立ち上がり、蝸

の声々のみが辺りの静寂を劈

く。人なき家々は、朽ちるに任せ、ただ除染作業の車と人影が在るのみだった。

「嗚呼、人は滅びる、されど自

然は、かくも旺盛たるか」と、

嘆息した。

放射能は、いずれ人を滅ぼす

だろう、しかし自然は、この元

素さえも抱きかかえて、何事も

無きかのように、年々歳々、青々

と茂り行くであろう。自然を前

に、「環境保護」といった善言

さえ人間の傲慢さであり、この

原発という怪物を世に送り出し

たのだと感じた。

そして、何故に福島が、離れ



田畑を続ける根本家の横では、物々しい除染作業が続く



一望、除染フレコンの山また山、ここまで津波が襲って来た



試験水田区域を見学。震災後も変わらず、福島の風景は美しく豊かだった。中嶋紀一先生と家内。

た首都の為に、負の遺産をかよ
うにも請け合ねばならなかつ
たのだろう、と我に問うた。

先祖探し

ある日、まほろばに郷土史家
で作家の大橋しのぶ女史から連
絡があった。

何でも、寺田本家の雅代夫人
の紹介でエリクサー浄水器を
購入し、拙著『倭詩』を読まれ

恩讐の 彼方に



大橋しのぶさん

た。そこに、「私の祖母と曾祖父二人が、福島県の会津若松から札幌に渡って造園業を営んだ……」の一文、それが心に掛かったという。そして、藤沢からわざわざお越しになられたのだ。

実は、彼女の母方の先祖も、会津だというのだ。会津といえ、あの戊辰戦争前夜のことを問われたのだから、私は歴史に甚だ疎く、愛憎の感慨を抱きようもなかった。彼女の祖を辿れば、木曾義仲の四天王、樋口次郎兼光で、何とあの巴御前の兄であったという歴きとした血筋。女史は、千葉の寺田本家と

も親しく、啓佐前当主の伝記を上梓され、シルクロード、ミヤンマーなどの異郷の文学を創作されるほど、不思議な感性を持ち合わせておられる。

対面して、在りし日の啓佐さんの思い出話をしていらっしゃるうちに、「ご先祖のお名前は？」と訊かれた。

「倉田です」
「良かったら調査して参ります」と挨拶され、間もなくお帰りになった。

札幌と会津の戸籍簿を送り、それから程無くして、女史より、資料に手紙が添えられて届いた。

倉田家は会津若松城郭外で、五街道―白河・二本松・越後・下野・米沢―の交差する町の中心地、「大町四辻」の角で検断の役。つまり町衆農民の世話役をし、町と藩政を取次ぎ、司法や消防などの諸役も兼ねて町全体を纏めていた庄屋の家系という。その古地図から建物と、微

に入り細に亘るまでの解説と写真が添付されていた。

その時、家系の由来を読み、俄かに鳥肌が立ち、電撃が体中に走り、しばしそれが続き、茫然として我を無くした。

宇多の御代から始まり、佐々木源氏を経て……との件に釘付けになった。

亡き祖母から生前、よく聞かされた文言で、ある法事の際、家系図を盗まれて、一度も目に触れることがなかったものと同じ内容だった。「あの話は、本当だったのだ」。

札幌と会津と離れても、なお確かなる証に、祖先の魂に呼ばれているかのような深刻な思いに駆られた。思いもよらぬ切っ掛けから、興味本位の先祖探しでなくなったこの先、重大な事実が気付くべき何か待ち受けているのだろうか。

次々と起る奇遇

それから間もなく、中嶋紀一



二本松市の「あぶくま農と暮らし塾」に招かれての家内の講演会

茨城大学名誉教授のお招きで、二本松市で有機農業の会「あぶくま農と暮らし塾」での家内の講演会と原発周辺跡地の視察に同行し、序でに初めて会津若松の旧市街に、大橋女史の案内で入った。この同じ福島島の悲劇の重なりが、何か偶然ではないような気がした。

幼き野口英世の火傷を手術した後、後に務めた病院、「青春館」のすぐ近辺、初めて目の当たり



大町四辻の石



倉田家址、レストラン「Luca」

にする本家の跡地に「大町四辻」の石杭が立てられ、旧郡山商業銀行の明治創建のビルが遺っていた。

今は、イタリアレストラン「Luca」の経営。記念に夕食をここでと入った。

中は古い明治大正ロマン漂う雰囲気、祖母の本家で会津の初めての晚餐をと張りこんだ。奥様と思しきサービスの方との会話で驚愕。何という偶然！



オーナーシェフ矢澤直之と奥様未来さん

札幌市西区平和生まれ、お母様はまほろばのお客様であることを知り、互いに目を見合わせた。その驚きと共に、更にマスターのご主人が、知人の「アクアパツツア」日高良実オーナーシェフの元で修業されたとか。日高氏の奥様、タカコ・ナカムラさんは、家内主宰の「インテグレート・マクロビオティック」を運営してくださっている。そんな仲なのだ。その関係の濃い者たちが先祖の跡地で活躍。

更に、直前、鶴ヶ城を散策していたさ中、映画『降りてゆく生き方』の製作者・森田貴英国際弁護士から偶然電話があり、「会津に來ているなら、『ふるさと街づくり』で、内閣総理大臣

賞を受賞した山口ご夫妻に、今回は是非お会いして欲しい」との託け。

早速その「Luca」で初対面、何と目の前のモダンな生活雑貨店「ZOO」の経営者。しかも、後述するが、先祖は同じ近江商人で日野出身。昭和の大恐慌で、数ある子孫の老舗がたつた三軒だけになってしまったという。翌日、自ら古文獻を調べられて、倉田と親戚筋に当たることも判明。ただ啞然として「こんな出会いがあるものだろうか」と、互いに驚くばかりであった。



山口勝啓・乃子ご夫妻

翌日、戊辰戦争後、米沢に一度身を寄せ、その後市内を転々とした曾祖父の足取りを訪ね、

祖母の生家跡、甲賀五番地を訪ね、今は亡き家から見上げる同じ碧空を仰ぎ、同じ空気を吸った。この甲賀は滋賀の故郷に想いを馳せて名付けられたのだ。三五〇年続いた本家の分家筋であるが、今は倉田を名乗る家は見当たらない。

ここから、札幌に向けて親子二人して心細い旅に立ったのだ。不便な昔の旅路、前途二五里、一千km、その心境は、どうであっただろうか。

会津から、さらに滋賀へ

だが、近所に今も残る初代藩主・蒲生氏郷の菩提寺と五輪の塔の墓。



蒲生氏の墓

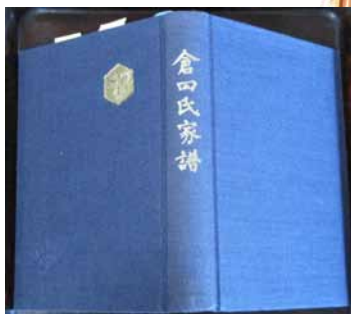
恩讐の 被方に

三重松阪を統治し、千利休の一番弟子でもあった彼は、名大名にして大茶人の武士であつた。秀吉の命に依り滋賀県日野から国替えで、会津に移封した。その時、大挙近江商人を連れて会津の街造りに当たつた。その二十八年前に、先駆けとして命じられた近江商人こそ、倉田新右衛門為實であつた。日野銃を扱つて生業としていたから、あのNHK大河ドラマ『八重の桜』の砲術師範・山本（新島）八重子家とは深い繋がりがあつたであらうかと推測された。

しかして、千葉県神崎の寺田本家のご先祖も、「三方よし」の日野商人で同郷であつたというのだ。寺田さんとの浅からぬ



寺田本家 23 代目故寺田啓佐さんと奥様雅代さん



倉田家譜



旧山中正吉宅「近江日野商人ふるさと館」

ご縁に、何かしら親近感があつたが、そういう因縁であつたのかと改めて感じ入つたのだ。

発酵学者・小泉武夫先生の福島県小野町の生家も酒造業。関東一円の酒・醬油・味噌など醸造業の多くは近江商人の流れであることを小泉先生から伺つていた。実際日野の近江商人館を訪ねると夥しい蔵元の銘柄が並べてあつた。更に、「倉田氏家譜」に依ると、倉田家の前は山中姓を名乗つていた。それは、今現地で博物館として公開されている旧山中正吉酒店の祖、山中兵右衛門の連なりで、一時会津にも行つて戻つた醸造家であつたのだ。今、少なからず、醸造発酵と関わりの深いまほろばは、こんな縁を端緒としていたのであろうか。

あかねさす紫野行き標野行き
野守は見ずや 君が袖振る

〈額田王（万葉集巻一・二十）〉



蒲生野とされ船岡山の麓にある「蒲生野遊獵」が描かれた巨大な陶板

一九六八年五月、私は、薬師寺の金堂復興勸進行脚に、頭を剃り墨染の衣を纏い、高田好胤管長に就いて初めて同行したのが、この額田王と天智天皇の歌が交わされた蒲生野であつた。この地、蒲生郡日野町の意味合いが、ほぼ半世紀を経た今、解き明かされた。

つまり、私は、初めから、誰かに呼ばれていたのだつた。

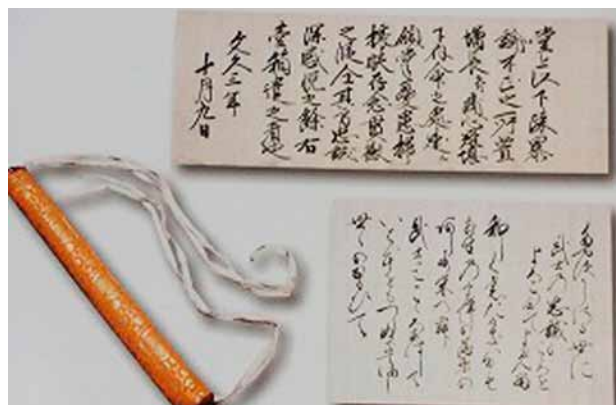
薩長への恨念、今もなお

会津を日々歩き、人々の話を聞いて感ずることは、戊辰戦争は一五〇年前のことではなく、昨日の我が事であったことだ。何故に、ここまで憎悪の溝を埋められないものがあるのだろうか。作晩聞いたことのように話す会津人にとって、それは恨んでも恨みきれない無念遣る方ない、先祖の遺言であり、吐息だった。

「義を以て倒るゝとも、不義を以て生きず」

その精忠、天地を貫く愚鈍ともいえる生き方は、死を以て今の世の審判を仰ぐものであった。

藩祖・保科正之の家訓十五カ条の絶対服従の教えも、將軍徳川慶喜からの京都守護職の厳命には逆らえなかった。火中の栗を拾わざるを得ない立場。日本中が長い物に巻かれる、とばかりに新政府に相寄る風潮が蔓延



【御宸翰】

堂上以下、暴論を疎ね、不正の処置増長につき、痛心に耐え難く、内命を下せしところ、すみやかに領掌し憂患掃攘、朕の存念貫徹の段、まったくその方の忠誠にて、深く感悦のあまり、右一箱これを遣わすもの也。
文久三年十月九日

【御製】

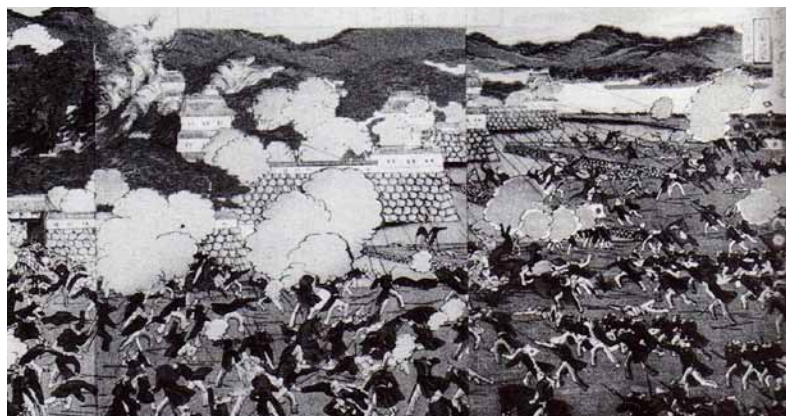
たやすからざる世に、武士（ものものふ）の忠誠のこころをよこびてよめる
和（やわ）らくもたけき心も相生の まつの落葉のあらず榮え舞
武士とこころあはしていはほをも つらぬきてまし世々の思ひて

する中、孤立無援の会津は、耐えた。信任された孝明天皇の崩御、だが、謀略に、朝敵の汚名を着せられ、幕府の生贄として矢面に立たされて一敗地に塗れた。あの時、松平容保に孝明天皇から信任するとの宸翰と御製を何故に公開しなかったのか。そうすれば、朝敵の汚名を着せられなかったものを……。
卑劣なる岩倉具視などが捏造した天皇討幕の密勅と錦の御旗、それを掲げて会津に攻め込



岩倉具視によって偽造された「錦の御旗」。日像と神号が書かれている。

んだ官軍。士族・町民無差別の殺戮は日本史を汚す蛮行だった。分捕り合戦に血眼になり、各家の土蔵を封印して略奪の限りを尽くした。それは子女にも及んだ。男根を切り、死人の口



1868年（慶応4年8月21日）「会津戦争」母成峠の戦い。

に啜えさせ、女子という女子は悉く蹂躪陵辱されて八歳にまで及んだとする。婦女を裸にして惨殺した振る舞いは強賊と言ふ他なかった。

武士たるもの、そこまで見境無きか。松陰の大和魂が啼くだろう！何処にか、武士の情けよ。その生き残った子女が当時の骨

恩讐の 被方に



幕末の会津藩家老の西郷頼母近恵
(ちかのり)肖像写真

殉難の婦女子は二三三名に及

〈頼母妻十重子(三十四歳)の辞世〉

なよ竹の 風にまかする 身ながらも たわまぬ節は ありとこそきけ

その辱めを受けぬため、家老・西郷頼母の一家は老母と妻、妹、五人の子女、一歳の季子に至るまで親戚十二人と共に自邸で自害し果てたのだ。

髓に刻まれた凄まじい情景、鬼畜の如きを今に語り継いだ。「会津に処女なし」とまで言われ、みな墮胎した。



西郷頼母の一族婦女子の自決

んだ。倉田家も町衆であったが、検断で藩に加担した罪を問われ、断罪された。

そして町の路傍に散乱した屍を葬ることさえ許さぬ遺体埋葬禁止令。死肉は禽獣に食うに任せ、死臭は町を覆った。見るに見かねて、検段は葬ることを嘆願すること幾度、だが触れる事さえ許されず、罰せられた。

が、遂に半年を過ぎ、埋葬の許しが降りた雪解けの春には、市街は凄惨極まりない地獄絵図となっていた。倉田家が創建

した七日町の街道筋 わずかばかりにある 阿弥陀寺に堆く山と 積まれた腐乱した屍を弔うこと千三百柱に上る遺骸。その煙は延々として幾日も続いた。阿弥陀寺入り口には、家を祭る五輪塔が三基、保科正之をも指南したという私の尊崇する先祖、儒学者横田三友俊益の初・二代の墓が置かれ、その横に討ち死にした藩士、町衆を弔う墓石と碑が今も厳かに祭られてあった。

飯盛山では白虎隊十九名が自刃、さらに年少の二本松少年隊六十二名も鬪つて逝った。

「かたくなまでのひとすじの道 愚か者だと笑いますか……、 気まじめ過ぎたまっすぐな愛 不器用者と笑いますか もう少し時がたおやかに過ぎたなら ……」



「阿弥陀寺」倉田家の三基の五輪塔



横田三友俊益：元和6年～元禄15年(1620～1702)
会津藩の教学の祖。幼少から博学多才で、17歳で堀杏庵、林羅山に学ぶ。加藤明成に仕えて信任を得、その後も学問をもって保科正之に仕えた。寛文4年(1664)、日本における地方教育の先駆けといわれる学問所・稽古堂を創設し藩士子弟の教育に当たった。

十二・三歳から一六・一七歳の、今では小学六年から高校生 の紅顔の少年たちは、死に追い詰められた。愛しき日々は帰らず、かような少年の命まで落とすことがなかっただろうに。

町衆は山野や米沢など藩外に 逃れ、藩士は下北斗南の地に遷



飯盛山では紅顔の少年兵たちが命の花を散らした

らされ、飢えと寒さで一万七千人中多くが離散し息途絶えた。勝海舟は、江戸城開城の際、西郷隆盛の会津への同情を抑え、非情にも一分の情も残さず見放した。武士魂が最期は、やさぐれの下級武士崩れに、謀略に貶められ、総なめにされたこ

とへの恨み辛みは、今尚消え去ることはない。それは最早、テロリストである他の何者でもなかった。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」。この一世紀半以上もの間、その怨念に耐えて来た。奥羽越列藩同盟の同じ負け組が、明治政府の財政を支え、東北、北海道に移住させられた消息を今更ながら知り、その押し込められた先祖の記憶が今また甦ろうとするのだろうか。

今に変わらない、だが「官軍」の名を借りた薩長の残虐非道極まりない仕打ちに心の傷は、時を超えて今なお癒えなかった。いずれの国史も、地方史も、それは戦乱の記述であり、歴史は勝者を正義として改竄する。「歴史の真実は、敗者の心情に語り継がれる」という。しかし、今尚、国内でこれほどまでに語り継がれている怨恨もなからうかと思うのだ。



旧会津藩士入植者の住宅 (余市)

なおも続く歴史の今

新政府は、戊辰戦争の結果、無防備となっていた北海道に謹慎中の会津藩士を送り、開拓民兼有事の際の軍隊とした。それはいわば遠島であった。ここ札幌市西区には琴似神社があり、明治八年、北海道開拓使最初の屯田兵として会津藩、伊達藩の巨理から琴似に入植した二四〇戸の人々によって開かれ、斗南の藩士も加わった。あのNHK朝のドラマ『マッサン』。その



琴似神社



田中土佐清玄墓

舞台となったニツカウ井スキーのある余市にも、日本で初めてのリング園を開いたという会津の藩士たち。また道南の瀬棚、函館の隣町・七飯にも渡った。その中でも、戦後日本のフィクサーと言われた田中清玄の祖が入植した。彼こそ、会津藩筆頭家老、田中土佐清玄の末裔であった。その直系の磯美雪さんは、まほろばの近く宮の森に在

恩讐の 被方に

住、親しくして戴いている。また音楽家・松本愛子女史の父方・小針家の白河藩は、会津戦争最大の凄絶たる前哨戦で敗れた。「白河以北一山百文」とまで、薩長土肥の新政府軍から東北以北は値なしという侮蔑の言葉に……平成まで耐えた。

私はここで、徒に、会津の惨状を炙りだしているのではない。この敗れた感情というものが、極めて大切ではなからうかと思っている。皇軍という正義の名の許に、何を為しても許されるという人間の異常性が、数多くの戦争の引き金になったのではなからうか。

この戊辰戦争を皮切りに、日本は日清、日露、満州、日中と立て続けに国外に向けて戦いを挑み、遂には無謀な太平洋戦争



日清戦争



日露戦争



太平洋戦争

にまで突入した。冷静に大観すれば、勝てる戦いではなかった。侵略と植民地支配の精神構造は会津もアジアも同じである。古代、大和朝廷が日本を平定する東征西征も、言ってみれば先住民の熊襲・蝦夷という原日本人を、武力を以て抑えたのだ。会津の悲しみは、縄文の悲しみなのだ。官軍が維新後、北海道でアイヌを制圧して同化政策を敷

いたのは耳に新しい。中国のチベット・ウイグルへの侵攻同化を責められようか。今でも彼らの、和人への屈辱の絶叫は、北の大地に響いているのだ。それは人が幾代替わるとも、大地が記憶しているのだ。蝦夷も阿弼流為も、無念の血と涙を流した。



阿弼流為 (アテルイ) 像

逆縁
これも続く驚くべき

そうは言っても、私はそのような眼で、少なくとも同じ日本人を意識して見たことはなかったのだ。無知であったが故に、生まれ里に依って差別のしようがなかったのだ。



恵庭市にある山口県移民の石碑

私は、北海道の恵庭という片田舎で生まれ育った。日本の歴史とは、ほど遠い因習の全くない原野で伸び伸びと成長した。だが、最近、あることで恵庭の歴史を調べて吃驚したのだ。

恵庭は、何と長州藩が開拓した町だったのだ。恵庭小学校の近く、横書きで「山口県人」、中央縦書きで「恵庭開拓記念碑」と刻まれた石碑が建っていたのを思い出す。行くと、そこには岸信介元首相（現・安倍首相の祖父）の揮毫、そして、移住開拓民の名前が列挙されていた。嘉屋、土屋、……そこには、小中学校の友の祖父たちの名前が書き連ねてあった。あいつもこいつもと、幼き日々の友の農

家や酪農家の子息は、皆長州から渡って来た子孫だったのだ。北東の外れにも山口区という純農業地域があり、そこに松園小学校があった。何と、そこは吉田松陰の松下村塾を慕って、「松園」と名付けたと聞いて愕然としたのだ。

今思えば、会津出の母が敵陣に乗り込んで来た構図になる。そんな事とは露知らず、過ごした幼き日々。そういえば、父が、当時一連の市長と町議と業者の不正を訴えて、孤軍奮闘して町政を変革しようとしたこともあり、そりが合わない過去の遠因がそうさせたとするのは、考え過ぎだろうか。

青年期は、『竜馬がゆく』など司馬遼太郎の幕末史観が世を席卷していた。岡潔先生の影響下に、昭和維新を志したりもした。松陰先生を慕い、東京での生活は、一汁一菜、麦飯に味噌ともやしの生活が続いた。

その後四〇年を経て、まほろばを開業してから、森下自然医学の会友で萩の名士、松陰神社の総代、入江邦春・アイ子ご夫妻がわざわざ「まほろば」に訪ね来られて友好の花を咲かせ、萩焼の香炉まで頂戴したことがあった。

また山口駅前のだ道場門前商店街振興組合の吉松昭夫理事長がお越しになり、北海道物産を販売したいとまほろばとの取引が始まった。そこは、聖フランシスコ・ザビエルが帰住して説教した山口ザビエル記念聖堂のある場所であった。前述のタカコ・ナカムラさんも山口県出身で大活躍されている。

そして、決定的なのが、源義経の家臣・佐藤継信・忠信兄弟。その佐々木四郎高綱の子孫兄・定信の末裔が、明治天皇崩御で殉死した乃木希典將軍で、弟定綱の末裔が倉田家であった。しかも、乃木大將は、長州藩の出



吉松昭夫理事長(右)



入江邦春・アイ子ご夫妻

恩讐の 彼方に



乃木将軍 佐々木神社



源義経家来 佐藤継信・忠信兄弟の墓。共に義経を守り戦い継信は屋島の戦いで討死、忠信は京都潜伏中に襲撃され自刃している。



「三子教訓状」毛利元就と「三本の矢」

身であった。これには、聊か言を失った。

思い起こせば、私が中学二年の時、亡き母が、死の床で三人の兄弟を呼び寄せ、三本の矢の譬えを以て、三人手を携えて仲良くすべきを説いて逝った。その話の主、毛利元就こそ、長州藩の始祖に他ならなかった。ここまで、二つ乍ら因縁を負うものかと考えた。

更に、夢薬局「エッセンチア」の篠原康幸代表。彼は千葉県旭町出身である。近くに習志野が



篠原國幹

あり、これは「篠原に習え」という明治天皇のご下命にて名付けられた地だった。その人こそ、篠原國幹、彼の曾祖父に当たる英傑であった。西南の役で、西郷に従い、最初に敵弾に当たり、討死にしたのだが、会津に入ったこともあり、敵に相違なかった。その子孫の彼は、体軀に秀で、心根は優しく、何故か寺田本家で修業し、今札幌で「まほるぼ」とも親しく、オリジナル製品創りに携わって下さっている。

そして、私の姉の亡き義兄は鹿兒島出身、根っからの薩摩隼人である。今回『倭詩II』の表紙を飾る日本画は息子辰介（ホセ・フランキー）が父の郷里武町の家を想像して描いた。それには、桜島・薩摩富士の煙が棚

引いている。独り子孫に至る因縁は一樣ではない。様々な地により、人により、時により、変わり、混ざり、深まる。

父方の山梨県富士吉田市明見の宮下家は、楠正成、北畠親房、三浦（宮下）義家と合議して南朝護持に動いたため、当時鎌倉幕府から弾圧を受け、また徳川幕府からの圧政にも苦しんだ。両親をして、片や徳川を守り、片や徳川を恐れる。敵も味方も加害も被害も入り交って層をなし、愛憎半ばする世に、今私たちは生まれた。まさに、「恩讐は彼方に」ある。血筋も、土地柄も、生まれもない。みな同じ一人の日本人として存在している。これこそ、紛れもない事実なのだ。

会津は四方山に囲まれ、藤沢文



楠正成銅像（皇居外苑）

学に見られるような閉鎖社会の中にも長閑で素朴な心情が培われた。そして親藩・徳川に仕える忠義の心は、「ならぬものは、ならぬものなり」との武士道で徹底された。

一方、長州は三方海に囲まれ開放的な土壌に交易も盛んだった。関ヶ原の戦いで、会津とも一戦を交え、外様として屈辱を味わった積年の幕府に対する恨みが、明治維新に爆発したともいえる。憎つくき幕府の唯一の象徴が会津であった。

報怨以德、それは恕

日中戦争、中国に多大なる戦禍を齎せた日本。

だが、蒋介石は敗戦敵国日本に「怒みに報いるに、徳を以てす」と、老子の「報怨以德」を借りて、見事許された。略奪も返還要求もなかった。大人の風格に、最後、日本は救わ



蒋介石 (1887年～1975年) 孫の後継者として北伐を完遂し、中華民国の統一を果たして同国の最高指導者となる。1928年から1931年と、1943年から1975年に死去するまで国家元首の地位にあった。しかし、国共内戦で毛沢東率いる中国共産党に敗れて1949年より台湾に移り、その後大陸支配を回復することなく没した。

れたのだ。

積年の恨みがあるとも、果たすところ、許す以外に、恨みは消えないだろう。

負の連鎖を断ち切るには、自らを引く、自らを空しくするしかない。東洋の虚の実践哲学が要る。尊皇攘夷も開国討幕も、一つの時代に縛られた囚われに過ぎない。本質を見据えるには、遠く離れて大観するしかない。それが許してもある。許しというより、元々何も無かった、一切は妄想なのだ。幻想なのだ。蒋介石の生地、浙江省寧波は商業都市にして王陽明の生誕地でもあった。日本で陽明学を継いだ祖が中江藤樹、日々行商をしながら母への孝養を尽くし、



中江藤樹 (1608～1648)、近江国出身、江戸初期の陽明学者。

士農工商みな平等を説いて、聖人と慕われた。その地こそ『三方よし』の近江である。「買一手よし、売り手よし、世間よし」の心即理の博愛思想は、世の中の和合を目指すものであった。そして、その思想の中核は何か。それは孔子の言う、「一言にして終身行うべき道、『恕』であった。その恕こそ、「人への思いやり」、仁にして愛に他ならない。

不思議の今

パツと目が覚めた寝起き、「この大川町は、あの大町四辻だったのか!」との閃きに似た思いが過った。



初生りの余市リンゴ「緋の衣」の樹



私は、今、余市の地に初めて起居し、仁木町の住人になろうとしている……。

以下、「後編」に続く……
(12月の大売り出しに掲載予定)